訳者後記

本書は、人間の心と体の関係（心身問題）に深い関心を抱き続け、催眠現象の厳密な批判的研究者として名をはせながら、二〇〇五年九月に七八歳で急逝したセオドア・ゼノフォン・バーバー（以下、著者）が、晩年の六年間をかけて、鳥類の行動を研究した成果（*The Human Nature of Birds: A Scientific Discovery with Startling Implications*. New York: St. Martin's Press, 1993）の邦訳です。著者は、催眠研究に〝革命〟を起こした異端児として、専門家の間では今なお非常に高い評価を受けている心理学者です（Gauld, 1992, Epilogue）。

本書は、刊行翌年の一九九四年にペンギンブックスに収録されました。ペンギンブックスは、わが国の文庫本に近い位置づけにあるので、英語圏ではそれなりに部数を重ねている一般向けの著書であることの、何よりの証拠です。著者は、本書が擬人主義の否定という、西洋世界で支配的なパラダイムの原則に反しているため、専門家から嘲笑されたり、直接、間接に攻撃されたりするのではないかと予測しています（本書、二一八ページ）。しかし、本書が専門家たちから――動物行動の研究者や認知心理学者から――実際に受けたのは、ある短評（Anonymous, 1995, p. 75）でいみじくも指摘されているように、むしろ黙殺に近い反応でした。これは、本書に存在価値がないということではなく、本書に真の意味での重要性があることを示す重要なしるしのように思います。

訳者が、刊行まもない時点で本書の存在を知ることができたのは、わが国ではほとんど購読者のいない心身医学系の雑誌（*Advances: The Journal of Mind-Body Health*）に、その短評が掲載されたおかげでした。それがなかったら、その存在を知るまでにかなり時間がかかったはずです。訳者が調べた限り、ナチュラリストやバードウォッチャーのための雑誌および、アメリカのアマゾン・コムを含むウェッブページに掲載された本書の書評は、ほとんどが好意的なものでした。それに対して、専門家向けの雑誌に掲載された書評は、その短評を含めて欧米でも三点（Anonymous, 1995; Dawkins, 1995; Hailman, 1994）しかなく、そのうちの二点は、著者の予測通り、嘲笑的、侮蔑（ぶべつ）的なものでした。このような書評を読んで本書を購入しようとする人は、ほとんどいないでしょう。本書には、これらの書評で揶揄（やゆ）されている逸話的な（珍しい実例に基づく）報告がたくさん掲載されています。たしかに、第10章末の「擬人化することに対する恐怖」という節などに引用されている古典的事例には、信憑性（しんぴょう）のはっきりしないものもあるでしょうが、だからといって、本書の基本的主張が無視されてよいことにはなりません。

それに対してわが国では、書評どころか、本書の原著を誰かが購入した形跡すらほとんどなく、国会図書館も含めて、所蔵図書館もないようです。わが国の一般読者が本書の存在を知らなかったのは、残念ながらその紹介者が誰もいなかったためなのでしょう。また、わが国の専門家たちがおそらく本書を手にすることがなかったのは、欧米の専門家が肯定的に評価しなかったためなのかもしれません。

本書の特徴

本書にまとめられた研究は、故ドナルド・グリフィンによる、〝考える動物〟に関する一連の著作に刺激を受けて始められたものだそうです。グリフィンは、コウモリの超音波や鳥の渡りの研究を通じ

て、わが国でもよく知られているアメリカの比較行動学者です。著者は、鳥類という、哺乳類とは異質な高い知能をもつグループの認知的、行動的な研究を中心に、主として最近の研究成果を徹底的に検討した末、本書第1章の冒頭に掲げられているように、グリフィンが得ていた結論をはるかにしのぐ、次のような結論にいたりました。中でもとくに1と3は、非常に革命的なものですが、著者が「頑固一徹（いってつ）な懐疑的研究者」（「はじめに」）であるだけに、専門家もあっさりとは無視できない結論のはずです。

1　鳥類は、音楽的能力（鑑賞力、作曲力、演奏力）や抽象的概念を生み出す能力、たえず変化する生活上の問題を、知能を柔軟に用いて解決する能力、喜んで遊び、つがう能力など、私たち人類が自分たち独自のものと当然のように考えている能力を、少なからずもっている。

2　人間は、いくつかの方面の能力（たとえば象徴的、言語的能力）では鳥よりもすぐれているが、鳥も、他の方面の能力（たとえば、渡りの能力）では、人間よりもすぐれている。

3　鳥は、知能や意識や意志をもっているばかりでなく、人間と知的なコミュニケーションをし、人間との間に、思いやりのある親友という関係を築く能力ももっている。（本書、二ページ）

このうち、2については、科学的に実証されている周知の事実なので、とくに異論はないでしょう。また、1としてまとめられている項目の多くについても、第1章で紹介されているような、最近の認知心理学的な実験的研究に通じていれば認めることができるはずです。しかし、3については、専門家か否かを問わず、受け入れにくい人たちが多いのではないでしょうか。ヨウムのアレックスを対象とした実験的研究（第1章）で得られた結論を除けば、主として実際に鳥たちとの間に個人的関係を築

いた、きわめて例外的な人たちの経験に基づく判断だからです。

この問題については、第5章と第8章でいくつかの事例がくわしく紹介されています。その中でも、ナチュラリストのレスリー夫妻が育てたカリフォルニアカケス、ベルンド・ハインリッチという動物学教授が自分の山小屋で育てあげたアメリカワシミミズク、シェリル・C・ウィルソンという行動科学者（催眠現象研究における著者の共同研究者）が自宅で放し飼いをしながら育てた三羽のセキセイインコ、レン・ハワードという音楽学者が自分の山小屋を解放して観察した、周辺に住む数多くの野鳥の行動や人間との交流がとくに印象的です。また、鳥たちの行動特徴や性格に非常に大きな個体差（それぞれの個体の間に見られる差）があることにも、誰もが驚かされるのではないでしょうか。このうち、ウィルソンのもの以外には邦訳（「原註」の訳註参照。ただし、ハワードの著書の邦訳は前半の第一部のみ）がありますので、関心のある方には、ぜひお読みいただきたいと思います。人間に対する恐怖心を克服した野鳥たちが、人間に対してどれほど遠慮なくふるまうものかが、また、人間とどれほど親密な関係を築くことができ、人間にどれほど真の姿を見せるものかがよくわかります。

本書で主張されているのは、要するに鳥たちは精密機械のようなものとは根本的に違って、それぞれが個性をもっており、刻々と変化する環境にひたすら翻弄（ほんろう）されるのではなく、それを積極的に利用するためにすぐれた能力を発揮するなど、きわめて主体的な生活を送っているということです。これらの点は、類書がほとんどないほど重要な、本書の最大の特徴です。本書には、鳥たちのこうした主体的な生きかたを裏づける実例がたくさん出てきます。人間のうちにさえ「機械的な動物」を見ようとする行動研究者が圧倒的多数を占める中で、著者は、動物の中に、「主体性をもつ人間的な特性」を見ようとしているという点で、とくに西洋では、きわめてまれな立場に立つ研究者と言えるでしょう。

本書で紹介されている中でもとりわけ興味深いのは、アレックスの事例ではないでしょうか。アレックスは、昨年（二〇〇七年）九月に三〇歳で死亡したそうですが、いわゆる〝オウム返し〟とは違って、口頭によるさまざまな質問に対して、人間の言葉で的確に答えるという、これまで動物ではありえないと考えられてきた、驚異的な能力を発揮し続けました[註1]。アレックスが言葉を文字通り使えたことについては、この方面の専門家の間でも意見が一致しているようです（たとえば、渡辺、一九九五年、九七―一一五ページ）。アレックスの実験のもようは、わが国でもテレビで放映されたことがあるので、その場面をごらんになった方もあるでしょう。なお、ペッパーバーグによれば、アレックスは、数字だけではなく、ゼロに類似した概念も理解していたそうです（Pepperberg & Gordon, 2005）。

ついでながらふれておくと、比較行動学の創始者として有名なコンラート・ローレンツも、自著『ソロモンの指環』の中で、人間の言葉を適切な場面で（たまたまなのかもしれませんが）正確に使った鳥の事例を二例（インコとカラス）紹介しています（ローレンツ、一九七〇年、一一九―一二二ページ）。

動物の擬人化という問題

本書がもつ特徴のひとつは、先ほど述べたように、鳥類に見られる人間的な特性を、具体的な証拠をあげながら浮き彫りにしていることです。場合によっては人間を大幅にしのぐ能力ばかりか、感情的な側面や個体差をも、大量のデータを駆使しながら明確に描き出しています。その際、著者は擬人化という手法を多用しているわけですが、ここに大きな問題が潜んでいるのです。これは、わが国の霊長類研究者が、その研究の最初期に、西洋の研究者たちからくりかえし直面させられて困惑した障壁と同質のもののようです[註2]。

西洋のキリスト教文化圏では、人間と動物を本質的に異質なものと考える伝統を根強くもっています。アメリカでは、周知のように現在ですら、進化論を学校で教えることを禁じている州がいくつかあるほどです。「なんじ、擬人化するなかれ！」（本書、一五一ページ）という要請は、動物を擬人的に見ることに少しも違和感を覚えない日本人からすると、まさに想像を絶するレベルにあるのです。[註3] これらの点については、わが国の霊長類研究を長年にわたって調べてきた、カナダのアルバータ大学人類学教授の次の発言を見るとはっきりわかるでしょう。

> 私を悩ませた〔中略〕のは、とにもかくにも行動を刺激と反応の連鎖として記述するという報告の形式で、ライオンが個性の違いによって反応したり、何らかの予見のようなものに導かれて行

註1　現在では、アレックスと同様の言語能力を発揮する鳥としては、インキーシー（N'kisi）という名前のオスのヨウムが知られています。たまたまテレビで見たアレックスに刺激を受けた女性が、一九八五年から複数のオウムに言葉の訓練をしてきたのです。インキーシーはそのうちの一羽でした。形態形成場という概念を唱えたことで日本でも有名なルパート・シェルドレイクは、飼い主と共同で、インキーシーを対象に史上初の人間・動物間のテレパシー実験を行ない、有意な結果を得ているようです（Sheldrake & Morgana, 2003）。

註2　ただし、わが国でも、動物が文化をもつかどうかという問題については、一九五〇年代半ばに論争がありました（たとえば、伊谷、一九九一年、五三―五六ページ）。しかし、それで決着がついたわけではなかったようです。たとえば訳者は、心理学科の学生だった一九六六年に、文化人類学のレポートとして、幸島（こうじま）（宮崎県）のサルたちの「イモ洗い」行動を、動物も文化をもつひとつの証拠だと書いたことがあるのですが、それに対して、その教授からわざわざそれを否定する長文の手紙をもらって驚いたことがあるからです。

動しているといった事例を記述することは許されなかったということです。その状況での外見からも明白な気持ちや、個性、あるいはまた「いじめる」といった行動について述べることは、擬人主義的であるとされ、受け容れられませんでした。〔中略〕

〔ベルギー出身の自然人類学者で上智大学名誉教授であった故・北原フリッシュによれば〕日本人にキリスト教の教義を説くときに、キリスト教では人間だけが霊魂をもっていて、ほかの動物やその他諸々の物はたんなる物質としてしか扱わないということを受け容れるのが、日本人にとってはことのほか難しいということです。〔中略〕

野生動物の行動についての科学的な報告の中で、それを動物の「心」のせいにすることを西欧のほとんどの研究者は避けるということです。そのことに関して、ジェーン・グドー〔グドール〕はずっと例外的な存在だったのですが、長年の間、彼女は科学的な仕事をしているとはみなされなかったのです。（アスキス、一九八四年、三七、三八、四二ページ）

キリスト教文化圏では、動物はどの個体も基本的にはすべて同一[註4]で、個性や主体性などはなく、ましてや人間的な特性などあるはずもないので、擬人的な表現というものを比喩的に使う以上のことは許されないのです。これでは、動物の行動を記述するのに大変不便であるだけでなく、動物の行動を研究するうえでも、かなりの制約が課せられることになるでしょう。

とはいえ、本書でも紹介されているフランス・ドゥ・ヴァールの『政治をするサル *Chimpanzee Politics*』（邦訳、どうぶつ社）という著書の書名を見てもわかるように、さしもの欧米の霊長類学者たちも、しばらく前からはわが国の霊長類学者たちに（多くは黙って）ならわざるをえなくなり、遅れば

せながら擬人化や個体識別という手法をとるようになってきました（ドゥ・ヴァール、二〇〇二年）。しかしそれも、ほとんどはまだ霊長類どまりのようです。本書は、そうした西洋的タブーを明らかに破っているばかりか、鳥類に人間的な特性が見られるという、西洋では考えられない結論を導き出しているのです。これでは、本書が西洋の専門家たちに無視されてもしかたがないでしょう。

しかし、こうした基本的な考えかたに抵抗があるわけではないわが国の読者に、とくにわが国の専門家たちに本書の存在が知られていないのはたいへん残念なことです。

動物の言葉という問題

ところで、鳥以外の動物がもつ知能の実例を紹介する第11章では、類人猿の言葉について、ゴリラ

註3　ウィスコンシン大学の鳥類行動の研究者は本書を、一部の種の同定に疑問があるなど、鳥類に関する知識が不十分であるし、鳥類観察の専門家にとって目新しいことが書かれているわけではないとして酷評する中で、大変興味深い見解を述べています。「擬人主義に対するタブーとされるものによって、研究が妨げられたことは、私の知る限り、ただの一度もない。実際のところ、擬人主義は認知比較行動学では問題とするに値しない。無生物や動物や自然現象に人間的な特性があるとすることは、断じて科学的ではないのだ」（Hailman, 1994, p. 581）。西洋では、鳥についてよく知っていると自認する鳥類行動の研究者にとっても、擬人主義はいぜんとしてタブーのようです。

註4　しかし、このような文化圏の中から、現在の定説である、（遺伝子上の差としての）個体差を進化の最大の要因とするネオ・ダーウィニズムという進化論（あるいは、統合説進化論）が出てきたのに対して、（外部からとらえられる差としての）個体差の大きさを十分理解している日本文化圏の中から、種の均一性を出発点とした、いわゆる今西進化論（たとえば、今西、一九八〇年）が出てきたのは、考えてみれば皮肉なことです。

のココとチンパンジーのワショー、わが国でも有名なピグミーチンパンジー（ボノボ）のカンジの例がとりあげられています。そうした類人猿たちと人間とのやりとりをみると、いずれも、人間とかなり共通すると思われる感情や概念をもっていることがわかります。また、類人猿たちが、自分なりに新しい言葉を創作したり、死という概念をもっている徴候を見せたりするのが本当だとすれば、本書で示されているように、人間特有のものとされている能力は、実は進化の過程の中でじょじょに準備されてきたものと考えざるをえなくなるでしょう。わが国の霊長類研究を創始した故・今西錦司（きんじ）も、「言語発生の下地は〔大脳が十分大きくなる前に〕すでにできていたと考えたほうがよい」（今西、一九七五年、二七一ページ）と発言しています。これは、類人猿ではなく、すでに人類になってからのことを言っているのですが、準備状態という着想は共通しています。

しかし、こうした動物の言葉については、本書にも登場する、言語学に〝革命〟を起こしたことで有名なノーム・チョムスキーが、それは真の言葉とは言えないと強く批判しています（Hauser, Chomsky & Fitch, 2002）。チョムスキーはカンジが使っているような言葉についても、「もし動物が言葉のような生物学的に有利な能力をもっているにもかかわらず、それをどういうわけか今まで使わなかったのだとすれば、教えられれば空を飛べる人間たちが住んでいる孤島を見つけるようなもので、進化論的にみて奇跡的なことだろう」と皮肉っています（Golden, 1991, p. 20）。

それに対して、カンジを乳児の時から身内の子どものようにして接してきたスー・サベージ－ランバウは、チョムスキーの想定している言葉は経験的なものではなく、頭で考えた理想的なものなのに対して、カンジの使う言葉は、人間の子どもが日常的な文化の中で自然に身につける原初的（プリミティブル）言語と同じものだとして、共同研究者の言語学者とともにチョムスキーに鋭く反論しています（Segerdahl et al.,

2005, pp. 159-180)。なお、カンジの言語能力については、わが国の代表的な類人猿研究者たちも肯定的な評価をしています（たとえば、西田、二〇〇七年、二二六―二二七ページ。古市、一九九三年）。

この論争は、何を言葉と認めるかという定義の問題にも関係していますが、その根底には、人間をあくまで動物と異質なものと考えようとするかどうかという、世界観の違いが潜んでいるように思います。著者の世界観は、人間や動植物を宇宙全体の中の調和的、主体的存在としてとらえようとする今西錦司の世界観（たとえば、今西、一九七二年）と相通ずるところがあるように見えます。この点はきわめて重要なので、後でもう一度ふれることにします。

環境破壊と人間の怠惰という問題

ところで、本書第12章（「動物の知能がもつ革命的な意味」）の「人間、この破壊するもの」という節では、人間による地球環境の破壊という今日的な問題が扱われています。本書の原著は、今から一五年前に出版されたわけですが、その間に、環境破壊は加速度的に進行し、本書で予言されている通り、地球温暖化という問題にまで発展しています。その結果として起こる海水面の上昇は、南洋諸島の国々にとっては、国家の存亡に直接かかわるきわめて深刻な問題です。

「他の生命体と同じように有能で特殊化した、地球上の生命体の一種」（本書、二一三ページ）にすぎない人間が、「自らを、支配権――地球やその生物種を支配し、望むがままに扱う生まれながらの権利――を与えられた存在だと思い込んでいる限り、地球を汚染、劣化させ、地球上の生物種を病気や死に追いやり続ける」（本書、二一四ページ）ことになるのはまちがいないでしょう。そしてそれは、人類という種の自滅への道でもあります。開放系であるにしても、地球全体がひとつの生態系として自

己完結している限り、人間も、地球上にすむ他の生きものたちと共存する以外に生きる道がないからです。著者は、人間がそうした窮地から脱しうる道を次のように提言しています。

> 人間も、地球上の生きとし生けるものも、同じようにすぐれて有能な存在であり、他の生物種がもつ特技も、象徴（シンボル）や道具を利用した自分たちの特技と同じように、畏敬の念に打たれるほど感動的なものだと考えるようになれば、人間は、破滅にいたる道を引き返すことができるだろう。
> （本書、二一四ページ）

人間は、自分こそ万物の霊長だとおごり高ぶったところで、個人にしても国家や民族という集団にしても、いまだに自分自身のコントロールがまともにできない状態でいること自体に変わりはありません。たとえば娯楽のように、自分の成長に役立たないこと（快楽をともなう行動）は簡単に実行できるのに対して、自分の成長にとって重要なこと（幸福に導く行動）は、〝頭〟でわかっていても、実行するのが難しいという事実は、誰もが経験的に知っています。言いかえれば、今の人間の意識はきわめて不完全なもので、まだまだ力が弱いということです。このことから人間は、その方向へ進化する余地のあることがはっきりわかるのではないでしょうか。

そのこととも関連する、もうひとつの非常に重要な個人的問題としては、締め切りまぎわにならないと重い腰があげられないという、人類にあまねく見られる行動特徴があげられます。それでいて、自分の進歩にはつながらないことがはっきりしている時間つぶし的行動は、非常に簡単にできるのです。その結果として自分が困ることになっても、行動の修正が非常に難しいのも、きわ立った特徴で

しょう（笠原、一九九七年）。締め切りがない場合には、その課題に一生手をつけないまま終わってしまう可能性が高いのではないでしょうか。外部からの要請があれば比較的容易にできる行動でも、自発的にはできないということです。その場合、人間は、自分の成長に役立つものか役立たないものかを、無意識のうちに正確に判断しているわけですから、意識にのぼらないところでは、大変すぐれた能力をたえず発揮していることになります。人間は、そうしたとてつもない能力を自分の意識から隠すために、また能力を使うという、非常に複雑なことをしているのです。人間のもつこの種の隠された能力については、機械論的な進化論の立場からは、どのように考えればよいのでしょうか。

いずれにせよ、このように人間は、自分にとって、すぐに大きな損害になることがはっきりしない限り、自発的に対応しようとしない傾向を根強くもっている（笠原、二〇〇四年）のですが、これほど重大で普遍的な現象を研究する専門家がほとんどいないのも、非常にふしぎなことです。ここでも、肝心な問題は避けられるという現象が明確に見てとれます。いずれにせよ、そのような行動の偏りが、多かれ少なかれほとんどの個人に共通して見られるということは、国家や民族という集団の場合には、同様の傾向が、その総計として、さらに深刻な形をとって現われるということにほかなりません。

たとえば、わが国で反核運動が始まったのは、一九五四年、マグロ漁船の第五福竜丸がビキニ環礁でひそかに行なわれた水爆実験で被爆し、〝原爆マグロ〟という形で現実が自分たちに突きつけられた後のことでした。それまでは、アメリカ側の隠ぺい工作（たとえば、核戦争防止・核兵器廃絶を訴える京都医師の会、一九九一年。ブラウ、一九八八年）があったにしても、被爆地以外の人たちには、放射線障害という問題の深刻さがなかなか実感できなかったのです。環境問題の改善の場合も、自分たちの足元が脅かされてからでは遅いことは、意識の上では誰もが知っているでしょう。にもかかわらず、重

要な課題をいつも先送りしようとする怠惰な個々人を根本から変身させるのはきわめて難しいため、各人の自発性を待っていたのでは手遅れになりかねません。

強い規制を課すことによってしか大きな目的が達成できないようでは、人間は〝万物の霊長〟という自己尊大的な称号を返上するしかないでしょう。それはそれとしても、「必要は発明の母」でしょうから、このような窮地におちいっている状態が人間を進化させる原動力になるのかもしれないので、そのことを楽しみに今後のなりゆきを見守ることにしましょう。

本書の独自性——心の位置づけ

本書が、動物の行動を扱った他の研究と根本的に違っているもうひとつの点は、心と体の関係になみなみならぬ関心をもち続けた心理学の専門家が執筆したものだということです。著者はまた、催眠現象の研究（バーバー、一九七五年）を通じて、人間の心がもつ力の大きさと意味とを熟知していました。催眠現象を起こすには、被術者（催眠の誘導を受ける人）がトランス状態に入ることが、伝統的に必要とされてきました。ところが、著者が提唱した考えかた（たとえば、Barber,1978）によれば、実際にはトランス状態は不要で、被術者の側に被暗示性（暗示にかかりやすい傾向）があれば、それだけでよいというのです。そのため、被術者の被暗示性が十分高い場合には、その人が覚醒状態でも、施術者（被術者に催眠の誘導を施す人）が、「これは熱いのでやけどします」などと唱えながら、皮膚に冷たい金属片を押し当てるだけで、その部位に火傷に似た変性が起こることがあるのです（Paul, 1963）。

あるいは、塗り薬ではそれほどの治療効果が期待できないいぼ（もちろん心因性のものではなく、ウイルス性の皮膚疾患）が、言葉による催眠暗示によって、かなり高率に（五割から七割ほどの比率で）消え

てしまうことは、催眠の専門家の間では周知の事実になっています（たとえば、スパノス他、二〇〇二年）。言葉による暗示だけで、冷たい金属を押し当てた部位にまれにせよ火傷のような変性が起こるのは、あるいは逆に、ウイルス性のいぼが高率に消えてしまうのは、いったいなぜなのでしょうか。

催眠現象の場合には、超常現象（ＥＳＰや念力）と違って、一般の科学者にも、その現象が起こること自体は認められています。医学的に不治とされている遺伝性の皮膚疾患（先天性魚鱗癬様紅皮症）が、催眠暗示だけでおおかた消えてしまったとか、重度の火傷を負い、通常の治療では必ず残るはずの後遺症が残らなかったという報告であっても、驚嘆されはしますが、その事実性を疑う専門家はあまりいないでしょう。ところが、こうした現象は、現在の科学知識ではまったく説明できないどころか、説明しようとする試みすらほとんどないのが実情なのです（笠原、一九九五年、一二七―一四八ページ）。

著者は、こうした催眠暗示現象の研究を始めるよりはるか以前の生物学の学生時代に、単細胞動物の観察を行なっていたそうです。その中で、単細胞動物が周辺の物体や出来事をたえず認識しながら、餌に向かって「意図的に、目的や計画性をもって」動く様子を目の当たりにして、単細胞動物も「クジラのように大きな水棲動物と同じく、目的をもった行動をとっているのではないか」と感じたのでした。その体験から、身のまわりにいるアリのような小動物に目を向けるようになり、次のような認識にいたったというのです。

> アリの観察を続ければ続けるほど、アリたちが私に気づき、例によって私をこわがっていることや、それぞれが、驚くほど人間的な心的能力をもったこびとのようにふるまうことがわかるようになった。こうした心的能力は、アリが自分の巣の仲間たちと協力し合っている時に、とくに

きわ立っていた。一群のアリは、栄養物を巣に運び込んだり、アブラムシを守り〝搾乳〟したり、他のアリの巣を襲って食料を奪ったり、自分たちの巣を迅速に、しかも効率よく修復するために飛び出してゆき、あらかじめ計画した通りに作業したりするような場合、それぞれが互いに協力し合うのである。（Barber, in press, Introduction）

このような経験や認識に加えて、哲学や現代物理学、化学、分子生物学、天文学などの豊富な知識から洞察を得た著者は、「陽子から蛋白質、単細胞動物からパルサーにいたるまで、宇宙のあらゆる存在は、ひとつの物理心理的な物質である。この物質は、それ自体のやりかたで、それ自体のレベルで知覚、記憶し、目的をもってふるまう」という、とてつもなく壮大な着想にいたるのです。

ところで、最後まで著者と親密な交流を続けていた心理学者であり、超常現象の研究者としても有名なスタンリー・クリップナーによれば、著者は、本書の続編にあたる著書（著者による仮題では『細胞の知恵 *The Wisdom of the Cell*』）の出版を計画していました（Krippner, 2006, 2008）。ところが著者は、その出版にこぎつける前に亡くなってしまったのです。この著書は、「〝変化しえない〟身体的なプロセスを（催眠）暗示により変化させる」という非常に興味深いタイトルをもつ著者の代表的論文（Barber, 1984）の拡張編でもあるそうです。

現代の科学者たちが当然のこととして想定（信仰）しているように、心は脳が活動した結果にすぎないとすれば、体の進化だけを考えていたこれまでの進化論の進展によって、心を含めたすべてがいずれ説明できることになるでしょう。しかし、もし心が脳の活動の副産物ではなく、超常現象の研究によって得られたさまざまな証拠（たとえば、笠原、一九八四年）が示しているように、独立して存在す

るものだとすると、心そのものの進化と、心と体の関係の進化の、少なくともふたつを考える必要が出てきます。著者は、この難問を独自の仮説によって解決しようとしたのです。

物理心理的な物質にかんする先ほどの引用文がそのエッセンスなのですが、この著書を通じて著者は、「物質は純粋に物理的で、非心理的で機械的だという定説を捨て、物質を物理心理的で意図をもつものとして、これまで以上に深く理解することにより、何百年もの間、哲学者たちを悩ませてきた心身問題という難問を解決することができた」と主張しています。これは、ダーウィニズムと（神による）創造説の双方を同時に乗り越えようとする、著者独自の着想であり世界観です。本書は、このような世界観をもった科学者による成果と考えなければなりません。

本書は一般向けの著作であると同時に、「行動科学および脳科学の研究者のための解説」という付録と、くわしい原註とが巻末についていることからもわかるように、その方面の研究者に向けて書かれた著作でもあります。動物を擬人化することに抵抗のないわが国の研究者の場合でも、最近の「行動研究の歩みは、〔自然〕淘汰論への忠誠の祈禱（きとう）を唱えながら、近代分子生物学の動向を片目でうかがい、動物機械論・人間機械論の新版を重ね、その都度、旗振りのあとに行列ができるということを続けている」（伊谷、一九九一年、五五ページ）状況のようです。つまり、わが国の研究者の間でも、動物を精密機械と見なす世界的な定説（すなわち権威）への従属願望という無意識的な誘惑も手伝って、動物には主体性はないとする考えかたが、ふしぎなことにいぜんとして大勢を占めているということです。

著者は、鳥たちの行動にかんする信頼性の高い観察を大量に提示することで、このように圧倒的な保守的状況に果敢に切り込もうとしているのです。〝変化しえない〟状況を変化させようとする、こうした著者の強い意志を念頭におきながら本書を読み直すと、鳥たちの行動のもつ意味が、さらに深遠

なものに見えてくるのではないでしょうか。また、現在の定説に真正面から挑んでいる本書の主張は、鳥類や動物行動の専門家ばかりでなく一般の科学者にとっても、大きな意味をもっているはずです。現代の科学知識体系は、〝偶然説〟とも言うべき基盤（宇宙の森羅万象はすべて偶然によって起こっているという暗黙の了解）の上に成立しているのですが、本書の主張が正しいかどうかは別にしても、本書の存在は、偶然説には科学的根拠がないという事実に、あらためて意識を向ける好機になるはずです。本訳書が、わが国の科学者の陣営からも無視されることのないよう切に願うものです。

二〇〇八年四月九日　　笠原敏雄

参考文献

P・アスキス（一九八四年）「霊長類学の行方」『思想』三月号、三六―五一ページ（川喜田二郎監修『今西錦司――その人と思想』〔一九八九年、ぺりかん社〕再録）

伊谷純一郎（一九九一年）『ヒト・サル・アフリカ――私の履歴書』日本経済新聞社

今西錦司（一九七二年）『生物の世界』講談社文庫（一九四一年、弘文堂書房。英語版は*A Japanese View of Nature: The World of Living Things*. RoutledgeCurzon, 2002）

今西錦司（一九八〇年）『主体性の進化論』中公新書

今西錦司他（一九七五年）『座談　今西錦司の世界』平凡社

核戦争防止・核兵器廃絶を訴える京都医師の会「医師たちのヒロシマ」刊行委員会編（一九九一年）『医師たちのヒロシマ――原爆災害調査の記録』機関紙共同出版

笠原敏雄編著（一九八四年）『死後の生存の科学』叢文社

笠原敏雄（一九九五年）『隠された心の力――唯物論という幻想』春秋社

笠原敏雄（一九九七年）『懲りない・困らない症候群――日常生活の精神病理学』春秋社（新装版『なぜあの人は懲りないのか困らないのか』として二〇〇五年に春秋社から再刊）
笠原敏雄（二〇〇四年）『幸福否定の構造』春秋社
N・P・スパノス他（二〇〇二年）「いぼの退縮に対する催眠療法、偽薬、サリチル酸治療の効果」笠原敏雄編『偽薬効果』（春秋社）所収
F・ドゥ・ヴァール（二〇〇二年）『サルとすし職人』西田利貞、藤井留美訳、原書房
西田利貞（二〇〇七年）『人間性はどこから来たか――サル学からのアプローチ』京都大学学術出版会
セオドー・X・バーバー（一九七五年）『催眠』成瀬悟策監修、戸田晋訳、誠信書房
M・ブラウ（一九八八年）『検閲 1945―1949――禁じられた原爆報道』立花誠逸訳、時事通信社
古市剛史（一九九三年）「監修を終えて――カンジに出会ってしまったヒト」S・サベージ-ランボー著『カンジ――言葉を持った天才ザル』（日本放送出版協会）所収
K・ローレンツ（一九七〇年）『ソロモンの指環』日高敏隆訳、早川書房（一九九八年、ハヤカワ文庫）
渡辺茂（一九九五年）『ピカソを見わけるハト――ヒトの認知、動物の認知』NHKブックス
Anonymous (1995). Book review: *The Human Nature of Birds. Advances: The Journal of Mind-Body Health, 11*, 75.
Barber, T.X. (1978). Hypnosis, suggestions, and psychosomatic phenomena: A new look from the standpoint of recent experimental studies. *American Journal of Clinical Hypnosis, 21*, 13-21.
Barber, T.X. (1984). Changing "unchangeable" bodily processes by (hypnotic) suggestions: A new look at hypnosis, cognitions, imagining, and the mind-body problem. In A.A. Sheikh (ed.), *Imagination and Healing* (pp. 69-128). New York: Baywood.
Barber, T.X. (in press).(ed. by S. Krippner et al.). *Revolutionary Philosophical Science: The Physicalmental Universe from Molecules, Cells, and Organisms to Quanta, Stars and Galaxies.*
Dawkins, M.S. (1995). Book review: *The Human Nature of Birds. Quarterly Review of Biology, 70*, 213.

Gauld, A. (1992). *A History of Hypnotism*. Cambridge and New York: Cambridge University Press.
Golden, F. (1991). Language watch: Clever Kanzi. *Discover, 12* (3), 20.
Hailman, J.P. (1994). Ornithological literature: *The Human Nature of Birds. The Wilson Bulletin, 106*, 580-82.
Hauser, M.D., Chomsky, N., and Fitch, W.T. (2002). The faculty of language: What is it, who has it, and how did it evolve? *Science, 298*, 1569-79.
Krippner, S. (2006). Remembering T.X. Barber. Paper presented at the 2006 Parapsychological Association convention, Stockholm, Sweden.
Krippner, S. (2008). Personal communications. March 30, 31, and April 1.
Paul, G.L. (1963). The production of blisters by hypnotic suggestion: Another look. *Psychosomatic Medicine, 25*, 233-44.
Pepperberg, I.M., and Gordon, J.D. (2005). Number comprehension by a grey parrot (*Psittacus erithacus*), including a zero-like concept. *Journal of Comparative Psychology, 119*, 197-209.
Segerdahl, P., Fields, W., and Savage-Rumbaugh, S. (2005). *Kanzi's Primal Language: The Cultural Initiation of Primates into Language*. New York: Palgrave Macmillan.
Sheldrake, R., and Morgana, A. (2003). Testing a language-using parrot for telepathy. *Journal of Scientific Exploration 17*, 601-15.

◎訳者紹介――**笠原敏雄**（かさはら・としお）＝一九四七年生まれ。早稲田大学心理学科を卒業後、北海道や東京の病院で心因性疾患を対象に独自の心理療法を続け、九六年、東京都品川区に〈心の研究室〉開設、現在に至る。編著書に、『幸福否定の構造』、『多重人格障害――その精神生理学的研究』、『偽薬効果』（以上、春秋社）、『超心理学読本』（講談社プラスアルファ文庫）、『希求の詩人・中原中也』（麗澤大学出版会）その他が、訳書に、『がんのセルフコントロール』（共訳、創元社）、『臨死体験』（春秋社）、『前世を記憶する子どもたち』、『前世を記憶する子どもたち2――ヨーロッパの事例から』、『転生した子どもたち――ヴァージニア大学・40年の「前世」研究』、『超心理学史』（以上、日本教文社）その他がある。
連絡先　〒一四一―〇〇三一　東京都品川区西五反田二―一〇―八―五一四　心の研究室
電子メール　kasahara@02.246.ne.jp　ホームページ　http://www.02.246.ne.jp/~kasahara/